

学位論文題名

昭和戦争期の知識人

- 普遍的な知識人の問題として -

学位論文内容の要旨

〔形式〕本論文は凡例、目次、第1部~第4部、参考文献一覧、表によって構成され、表を除いた部分はA4判縦書き、327頁である。余白部分を除くと、400字詰め原稿用紙に換算して、861枚に相当し、表が1枚添えられている。

〔内容〕本論文の著者は、まず第1部第1章で問題提起をしている。①知識人の社会における貢献と負の機能という二重の機能を同時に把握することの重要性、②知識人の戦争期の負の機能がその時代の特殊性以上に普遍的な問題を含んでおり、現在にも何らかの形で継続していること、③従って、現在の知識人の役割をめぐる新しい方法論の獲得が必要であり、それは過去の問題の正しい検証を通してはじめて可能になる。第2章『知識人』の役割意識の形成と近代的=植民地主義言説』では、明治の知識人の「人民」・「貧民」への眼差しと、東洋の他民族への眼差しに注目することで、「他者」救済、教導に関わる「近代的=植民地言説」の形成の様相を内村鑑三、福沢諭吉、新渡戸稲造、北村透谷を取り上げて記述する。第3章「昭和十年前後の思想的な状況」では、第2部を論じる基盤として、昭和十年前後の日本の思想的状況が全体的に「西洋」・「近代」批判を根底に据えた聖戦イデオロギ-と親和性を持っていたことについて概観している。

第2部では、戦争期の知識人の国家権力への「屈服」、「暗黒の時代」という従来の認識を相対化しながら、いかに知識人が主体的に帝国主義体制をささえていたかということと、そこに作用するメカニズムを明かにする。第1章「帝国主義とヒューマニズム」では、プロレタリア作家を取り上げ、一般的には対立するものと考えられがちなマルクス主義と「大東亜共栄圏」思想の両方にヒューマニズムという要素を指摘する。そして、戦争期に南方に徴用された高見順、武田麟太郎などの旧プロレタリア作家が、かつてのプロレタリアの代替物としてアジアの諸民族を見だし、「大東亜共栄圏」思想が持つ現実的な矛盾を消去してそれを理想実現のためのより所としたことを論証している。この事態が生じた要因を著者は、彼らの「他者」への欲求の強さのためであり、彼らが「近代的=植民地主義言説」に支配されていたからであるとしている。

第2章「〈崇高性〉の物語-三木清の『ヒューマニズム』・『行為の哲学』-」では、「新しい人間のタイプ」の創造の必要性を説いて「ヒューマニズム」を提唱した三木清がその過程で「行動の哲学」へと進み、日中戦争を東洋・世界変革のための「歴史的行為」として位置付けるに至るまでを検証し、その場合のエネルギー源が知識人の役割の〈崇高性〉認識であったことを明かに

する。第3章「植民地支配下の『民族』概念の二重性と、選択=排除の論理」では、朝鮮の歴史を日本の歴史の一部と考え、朝鮮の作家・李光洙を取り上げている。大正五年から日本に留学して早稲田大学に学んだこの作家は、「文明」に接し自ら「文明人」となることで、前近代的な生活方式を持つ朝鮮人を「非支配者共同体」と認識しながらも、それよりも強く救済、教導すべき他者」と認識することで、朝鮮人の「日本人」化に積極的な役割を果たした。ここでは李光洙という親日家の作家の行為を考察して選択=排除のメカニズムを解明している。第4章「国民統一化言説の編制と知識人」では、昭和十年代の「国民文学論」を手掛かりにして国民統一化言説が強化されるメカニズムと権力形成に関わる知識人の問題を考察している。ファシズム台頭期の知識人による無自覚な「国民文学論」提唱をきっかけに論議が膨らんでいき、そこに同時代の様々な論議が加わって、太平洋戦争期の「国民文学論」が形成される。それは単独に社会において機能するのではなく、総体としての国民統一化言説の中に含まれる。そこでこれらへの批評のパースペクティブが問題となる。この総体を批評するためには、国民統一化の核になる「国民」という概念、天皇制もしくは聖戦イデオロギ-を取り上げなければならない。ここに、批評の〈不可能の事態〉が生じる。しかしまた、知識人自身も、その事態=時代の〈暗黒性〉をもたらした主体にはかならない、としている。第5章「背反的な他者表象」では、戦争期の日本植民地他民族を扱った文学作品を取り上げ、中野重治、花田清輝、中島敦などの他民族への言説を分析して、「大東亜共栄圏」という理想のために他民族を「日本人」と見なした多くの日本の知識人の欺瞞性を指摘している。

第3部では、第1章「戦争期文学研究の相対化」において従来の戦争期文学研究における〈抵抗-協力〉という枠組みを中心に方法論的な批判を行い、日本の研究者が恣意的に「文学的抵抗」、「戦争協力」という用語を用いることの安易性、基準の曖昧さを指摘している。第2章「言論統制と〈言説の規範化〉」は、言論統制を相対化した上でその様相を記述し、そこから生まれる言説形態を〈非時代的言説〉としている。それは、体制に対して批判的なものであり、きわめて読み取りにくい内容になっている。しかも、しばしば逆の形態と言える〈時代的言説〉を内包したものである。具体的に山川均の文章を例にして、〈非時代的言説〉がいかにか〈時代的言説〉として読まれやすいかという点を説明したものである。第3章と第4章では太宰治が戦争末期に中国からの留学生魯迅をモデルにして書き下ろした『惜別』と『右大臣実朝』を取り上げている。ここでは、太宰治が体制を批判する意図、つまり〈非時代的言説〉で書いたつもりが、戦争協力、つまり〈時代的言説〉として読まれる傾向が強かったことを同時代の批評を資料にして論証する。そこで問題になるのは、太宰治が創作をする際の意識であるとし、体制を批判しようとする〈崇高性〉認識が逆に機能してしまったのか、それとも文学の社会との断絶性を信じたのかは定かではないが、いずれにしても体制を補強する可能性が高かったことは否めないとしている。

第4部は「普遍的な知識人の問題という枠組みの中で」という題でまとめている。第1~3部までの論述をふまえて、戦後の日本知識人の普遍的な問題の中で捉え直し、さらに戦後の日本の「オリエンタリズム」を見据えて、「暗愚」という語によって戦争責任やそれをめぐる自省の可能性を消去してしまった高村光太郎の例をあげて、知識人全体における戦争の意味の置き換えの論理、現在の「新しい歴史教科書を作る会」の主張などについて批判的に検討している。戦後や現在の日本の知識人は、戦争期の知識人の行動と思想をパターンとして連続的に継承していると述べている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 神 谷 忠 孝
副 査 教 授 井 上 勝 生
副 査 助 教 授 高 木 博 志
副 査 助 教 授 中 山 昭 彦

学 位 論 文 題 名

昭和戦争期の知識人

— 普遍的な知識人の問題として —

本委員会は、上記の論文を審査するに際して、基礎的な手続きの面と内容面に分け、本論文が新しい研究の方向を拓くものと評価できるか否かを検討した。このうち基礎的な手続としては、明治期から現代にいたる文学、思想、歴史、哲学とその関連領域を対象とするに際しての、必要とされる文献資料の適否、当該分野の研究史の把握の度合いと参考文献の理解度引用文献の正確さ等の点についてであり、また、内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各部、各章ごとのテーマとその展開、主要な概念の厳密さと方法の有効性、学術研究としての達成度等についてである。以下、それらの検討の結果と本委員会の評価とを、要点をしぼって説明してゆくことにする。

本論文は、明治から昭和時代にかけて政府がとったアジア政策に、日本の知識人がどのように関わったかについて、日本近代文学を中心に日本近代史、日本思想史、日本哲学史を視野に入れて総合的に考察しようとしたものである。そのために、各分野における一次資料や研究文献等を幅広く収集し、それらに対するバランスのとれた目配りを示している。確かに個々の分野の人物について、すべての文献を網羅しているわけではないが、個々の分野の典型的な人物をとりあげて的確に問題点をしぼり、研究文献を選択する手続きには手抜かりはなく、このような大きなテーマを扱う上では適切な対処の仕方であるといえる。

また、このような幅広く収集した文献に振り回されることなく、多くの資料を十分に理解した上で整理し、相互の関連性を見いだしている。そのような手続きを踏まえた上で、各時代の人物のテーマに関係する論文を正確に読みこなした上で問題点を明かにしている。

その他、従来の研究史の把握とそれに対する批判にも十分な説得力があり、注の数も適量に達している。資料の引用も厳密で正確である。

次に内容面についてであるが、第1部第1章で、「知識人」の定義について外国や日本の最近の著書にも言及して、どの時代にあっても知識人の役割は良い悪いにかかわらず有ることを確認し、過去の過ちを見据えた上で、普遍的に知識人の役割について新しい方法論を構築することの必要性が説かれている。

第2章では福沢諭吉、内村鑑三、新渡戸稲造などのアジア諸民族への発言を批判的に取り上げ、北村透谷の「庶民」観も視野に入れて知識人の役割意識が明治期に形成されたことを明かにしている。第3章は昭和10年前後の言論界を検証して明治期以来の知識人の役割意識が昭和に受け継がれていることを確認している。

第2部は本論文の中心をなすものである。第1章は、マルクス主義を信奉しプロレタリア文学者として活躍した高見順、武田麟太郎、間宮茂輔などが、南方徴用で東南アジアに出掛け「大東亜共栄圏」思想を普及することに尽力した理由が「ヒューマニズム」にあることを証明してみせたところは、従来日本の研究者が指摘していなかった視点である。第2章では三木清という哲学者が戦時下の全体主義に抵抗する姿勢を貫きながら日中戦争を肯定したのは、知識人の役割の「崇高性」認識であったことを明かにして、哲学者の多くが戦争を容認した意味を考えようとしている。第3章で植民地下の朝鮮人作家を取り上げて、親日派とされた朝鮮の知識人が朝鮮の近代化のために朝鮮人の「日本人」化に貢献した実態を韓国の文献を読解することで明かにしている。第4章は戦前の「国民文学論」について調べ、文学者が戦争に加担してゆく過程を明かにする。この部分も日本の研究者が手をつけていなかったところである。第5章は朝鮮人を題材にした日本文学を取り上げ作品に内包する差別意識を問題にしている。

第3部第1章では、日本で行われている戦争期文学研究における「抵抗-協力」という枠組みに疑義を提出し、第2章で戦時下の言論統制を概観しながら、これまであまり問題にされなかった読者の受容という観点を導入している。第3、4章では太宰治の「右大臣実朝」「惜別」を取り上げ従来の研究を踏まえた上で太宰という作家が表現の上で協力的のようにみせながら抵抗する場合やその逆などを問題にしてみせる。第4部はまとめと今後の展望である。

本論文は日本近代史、思想史、文学史にまたがる他民族への日本の知識人の言説を歴史的に考察したものであり、特に戦争期における知識人の言説を具体的に取り上げて日本近代の問題点を明かにしたところに意義がある。ヒューマニズムの歴史的な概念への考察に深まりがないという難点はあるものの、各章における問題提起は説得力がある。本委員会は上記のことを総合的に評価して、本論文が博士(文学)を授与されるにふさわしいものであるという結論に達した。